



かわかみ かずよし

川上 和義 教授

～ 感染分子病態解析学分野 ～

講義題目

感染症を免疫学的視点から紐解く

～臨床への応用を目指して～

【略 歴】

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1983年 3月 長崎大学医学部卒業 | 1998年 5月 琉球大学医学部附属病院第一内科講師 |
| 1983年 6月 長崎大学医学部附属病院研修医 | 2002年 2月 琉球大学医学部内科学第一講座助教授 |
| 1989年 3月 熊本大学大学院医学研究科博士課程修了 | 2005年 4月 東北大学医学部教授 |
| 1990年 4月 米国マサチューセッツ大学医学部博士研究員 | 東北大学医療短期大学部教授（併任～2006年3月） |
| 1991年10月 長崎大学医学部附属病院第二内科医員 | 2008年 4月 東北大学大学院医学系研究科教授 |
| 1992年 4月 国立療養所長崎病院内科医師 | 2023年 3月 退職 |
| 1993年 4月 琉球大学医学部附属病院第一内科助手 | |

【研究業績等の紹介】

川上和義教授は、1985年から熊本大学医学部免疫医学研究施設生化学部門（尾上 薫教授）で大学院生として基礎免疫学、特に T 細胞活性化機序の研究を開始され、1990年からは留学先の米国マサチューセッツ大学医学部分子遺伝学微生物学教室（David Parker 教授）で、その当時まだ十分解明されていなかったヘルパーT細胞に依存した B 細胞活性化機序の解明に取り組まれました。帰国後、母校の長崎大学医学部附属病院第二内科及び国立療養所長崎病院で臨床医として勤務された後、1993年からは琉球大学医学部第一内科で13年間に渡り、結核や真菌、肺炎球菌に対する感染防御免疫機構について、特に自然免疫に重点を置いた基礎及び臨床研究を推進し、論文や学会などを通して数多くの重要な情報を発信してこられました。

2005年に東北大学に赴任されてからは、それまでの感染免疫研究を継続するとともに、基礎研究の臨床への応用にも取り組まれました。酸化鉄ナノ粒子を用いることで、肺炎球菌やクリプトコックス、SARS-CoV-2の新規ワクチンの開発を試み、動物モデルで良好なワクチン効果を示すことに成功されています。また、琉球大学時代から継続的に取り組んできたクリプトコックスの感染免疫研究の臨床への展開として、それまでの臨床的エビデンスから予想されていた免疫不全に伴う潜

在性感染からの内因性再燃発症仮説を実証すべく、本真菌に対する特異的な T 細胞受容体を高発現するトランスジェニックマウスを世界に先駆けて樹立されました。本マウスを用いることで、潜在性感染からの内因性再燃発症モデルの作成に成功し、その免疫機序の解析を進められてきました。さらに、潜在性クリプトコックス感染の診断法を開発するために、結核を参考として IFN- γ -Release Assay (IGRA) のプロトタイプを作成に成功するとともに、中国広東省広州市にある中山大学医学部第三附属医院呼吸器内科との共同研究により、臨床応用に向けた予備的試験にも取り組まれています。これまでの真菌研究の功績に対して、2022 年 10 月に日本医真菌学会から特別功労賞を受賞されています。川上教授は、海外との共同研究にも積極的に取り組み、2006 年から 4 年間、J-GRID の支援でタイ NIH や国立 Queen Sirikit 小児病院との急性下気道感染症に関する共同研究、2008 年から継続的に中国広東省広州市の中山大学や広州胸科医院との結核、真菌に関する研究、2020 年からは英国バーミンガム大学との真菌感染免疫に関する共同研究を推進してこられました。それまでの交流実績により、2020 年には東北大学と中山大学との学術交流協定の締結に貢献されています。

このように、川上和義教授は、研究、教育、人材育成、国際協力の面で優れた業績をあげられた他にも、日本生体防御学会の理事長、理事・監事、日本感染症学会の理事、日本医真菌学会の代議員を務められるなど、感染症や感染免疫学の領域で重要な役割を果たしてこられました。